慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本人最初の印度支那半島横断(二)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.156- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0156

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本人最初の印度支那半島横斷（二）

此の行ラオスに入つて以來佛人官吏によつて優遇され、シアムに於けるよりも稍々安全な旅行をなしてをる。たゞ兩氏が本來僧侶ならざりしことは佛人には看破されし如く、招待宴の席上などで揶揄されてをるのも面白い。河内に來てからは安南人の警官が二名監視し、擧動に注目されてをるが、大體佛人は此の無鐵砲な二人に好感を持つてゐたらしい。著者もシアム人に對してより寧ろラオス人に對し、其の將來を期待し、フランスの殖民政策にも御世辭をふりまいてをる。佛國地方官がよく二人を優待し、日佛親睦を說いてをるのは現在の態度と同樣で當時の極東の狀勢の今日と稍々似てをつた爲であらうか。河内から愈々出發と云ふ前日に山本氏は熱病になり二十六歲を一期として永眠した。山中の瘴毒に觸れたためであり、高岳親王遺跡探檢の犧牲となつて遂に骸を異境に埋むることとなつたのは氣の毒の至りである。同書に四月二十二日「遺骸を外國人共同墓地に葬る。棺は草花を以て美々敷裝飾し之を二頭立の馬車に乘せ府内在留の日本人は悉く葬に會す。就中佛國政廳より憲兵を派出して之を護衞せしめしは特筆すべき一事となす」（一九一）とある。かくて岩本氏一人友を失ひて孤影悄然二十六日河防出發五月十六日東京新橋に歸着した。要するに此の旅行はいさゝか無暴過ぎる嫌ひはあつたが當時に於て徒步しかも無錢で、此の大半島を横斷した壯擧は福島大將のシベリア横斷などと比してけして劣らぬ冒險旅行であつたと云へる。たゞ私人の一企畫であつた爲に世人に顧られず忘却せられてしまつたのは氣の毒と云はねばならぬ。

然し此處に少し附記して置きたいことは高岳親王の御遺跡の問題である。これに就てはいろ〳〵論戰も行はれたが桑原博士の「高岳親王の御渡天に就いて」が六條學報（明治四十三年）に掲載され、ついで「東洋史說苑」（昭和二年）に附記を添へて蒐錄せられ今のシンガポール附近だといふ斷案が今日の定說となつてをる。所がかういふ學者の勞作は一般讀書界にあまり注意せられてゐないと見え、今でも親王の崩御地をラオスとする俗說が横行してをるのは遺憾である（一六四頁に續く）。